

小学校での英語教育を考える
- 栃木県の県勢発揚 11 か条とは -

開倫塾

塾長 林 明夫

1. 小学校での英語教育を考える

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

2年後からは、小学校でも英語が必修になります。4月12日の栃木県内で30万部以上発売されている下野新聞によりますと、栃木県では、8割の小学校が前倒しで、今年から英語教育を実施することです。1年間に約35時限(1時限45分)の英語の授業を計画しているそうです。

県内の30市町村の教育委員会によりますと、今年は325校が指導要領を前倒しする形で、年間35時間以上の授業を計画しています。栃木県内には全部で402の小学校がありますから、その81%に相当します。これは非常によいことではないかと私は思います。

ただ、問題点がいくつかあります。1つめは、1週間に1回(1時限)45分の授業でよいのかということです。私は、語学であれば、できれば1週間に3回、もっと言えば毎日のように授業があったほうがよいと思います。学校では年間に35週授業を行いますので、1週間に3回ぐらい英語の授業をやっていただくと、最低でも1年間に100時限となり、英語の力がついてくると思われます。ちなみに、学校の授業は年間に35週分と言われています。35時限が1つの単位になります。これも、皆さんにぜひ覚えておいていただきたいと思います。

このように小学校英語教育の問題点の1つめは、英語の授業時間があまりにも少なすぎるということです。

2つめは、誰が教えるのかという問題です。教える先生が十分に揃っていませんので、小学校の場合は、クラス担任の先生が英語を教える可能性が高くなります。小学校のクラス担任の先生は英語が得意かと言いますと、言いにくいことですが得意な先生ばかりではありません。ですから、クラス担任の先生は自分で英語の勉強を十分にしてから教えていただきたいと思います。

きつい言い方をしますと、ピアノの弾けない人がいくら熱心に教えても、教わる生徒は弾けるようにはなりません。また、水泳のよくできないコーチがいくら水泳を教えても、教わる生徒は上手に泳げるようにはなりません。同様に、英語に堪能でない人、英語によるコミュニケーション能力のない人がいくら教えても、子どもたちは英語が上手にできるようにはならないのです。

では、教える先生はどのくらいできればよいのでしょうか。英語によるコミュニケーション能力が身についている人、例えば読む力とすれば英語の新聞がスラスラ読めるというのが最低のラインですので、教える先生は英字新聞を家で毎日購読して、それがスラスラ読めるようになるまで勉強していただきたいと思います。

ただ、全国的には2年後から実施する小学校での英語教育を、栃木県では県内の8割にあたる小学校がその準備を新年度から始めるということで、栃木県は非常に頑張っている方であると考えます。小学校の先生方は大変でしょうが、英語教育に邁進していただきたいと思います。

2. 栃木県の県勢発揚11か条

それから、同日4月12日の下野新聞を読んでいましたら、以前にオマーンやネパールで大使をされた神永善次先生が、「日曜論壇」にすばらしい文章を書いていらっしゃいました。栃木県の県勢を高めるためには11の大事なことがあるという「県勢発揚11か条を提案」と題した文章です。これを少し紹介させていただきます。

神長先生は、私の尊敬するすばらしい方で、先週も2時間ほど個人的にお話をお伺いする機会がありました。

神長先生は、栃木県と世界、東京・関西に人生の三分の一ずつを住まわれ、そこで過ごしていらっしゃいます。そして、それぞれの土地から栃木県を見つめて、県勢の輝く発揚を願ってこられました。その思いを11か条にまとめたものが、前述の文章です。

(1)一番大事なことは、自分自身でまずは県の姿を知ることです。栃木県は、那須を扇の要に、東南に八溝山系、西南に日光足尾山地が走り、扇の腹の南の境を渡良瀬川と水戸線北部が区切っています。関東平野や首都圏の北の奥座敷です。また、縄文以来の歴史があり、中世には小山や足利、宇都宮、那須といった諸藩が割拠して、あるいは連衡して、外側の白河や陸奥、上野(こうずけ)、武蔵などの諸藩と戦いつつこの地を守ってきたというすばらしい歴史があります。これらのことをまず知ったほうがよいということです。

(2)次は、豊かな自然を知り、活かすことが大事であるということです。栃木県は豊かな水と緑に恵まれています。里山や深山(奥深い山)がありますので、それらをよく知り活かすことが大事です。例えば、みかん栽培の北限、リンゴ栽培の南限は栃木県です。また、サケの大量遡上の南限でもあります。それから、地震や台風、雨、雪の被害が非常に少ないめずらしい土地です。このような特色のある栃木県ですから、農業や教育、観光、別荘、転地(移り住む場所)として、最後は老後生活を送る場所として適しています。この豊かな自然のすばらしさを知り尽くして活かすことが大事であるというのが、2つめです。

(3)3 つめは、産業立地が優れているので、この好条件を活かしたほうがよいということです。豊かな水・澄んだ空気は、精密機械や先端技術にとっては非常に好い条件です。また、首都圏を背景にして幹線道路が走り、港や飛行場へのアクセスもよいですから、産業立地として優れています。神永先生は、この好条件を活かしたほうがよいとおっしゃっています。

そのほかにも、(4)優れた人材を輩出する伝統を誇りとしたほうがよいこと、(5)日本一の気構えを持つことがたくさんあること、世界一を目指すにはどうしたらよいかということ、(6)当世随一の教育を行うことが大事であること、(7)研究機関(シンクタンク)を作ったほうがよいこと、(8)安全と福祉の確認・増進を図ること、(9)自治と(10)和の魂の精神を頑張って持ち、最終的には(11)地方力を取り戻すことが大事であるということなどについて、すばらしい文章を書いています。

皆様もぜひ栃木県のよさを考え、そのよさを活かして 21 世紀をリードし日本の鏡となるべく、栃木県の県勢を高めてもらいたいと神長先生はおっしゃっています。私もその通りだと思います。皆様はどのようにお考えでしょうか。

[コメント]

2 つの重いテーマを 4 月 18 日の同じ日の番組の中で取り上げてしまった。ものごとを突きつけて考えていくと、栃木県のあるべき姿については、神長先生の 11 か条に行き着く。小学校英語は担い手である先生の資質・力量が最大のテーマとなる。わかっていながなぜできないのか、歯がゆいばかりだ。

- 2009 年 9 月 14 日 林 明夫記 -